國學院大學経済学部

「ゼミ成果発表会」

開催報告

日時 • 令和５年12月17日(日)12：00～16：30

一つのテーマを深めていった 研究成果を堂々発表

経済学部では、2018年度より各ゼミ(専門演習)で取り組んでいる普段の学びの成果を学生たちが発表する「ゼミ成果発表会」を開催しています。同発表会の特徴は学科や学年の垣根を超えて発表する会になっていることです。したがって、さまざまな視点からの発表を聴くことができます。

2023年度の同発表会は12月17日(日)に雲一つない晴天の下で開かれました。会場となった１号館には先輩や仲間、後輩の発表を聴こうと多くの学生が集り、各教室ともに熱気に溢れました。

４つの共通論題と35の自由論題で多彩な内容に

ゼミ成果発表会は２つの論題から構成されています。一つは毎回テーマが設定される「共通論題」で、今回は多様性を意味する「ダイバーシティ」です。もう一つは普段のゼミで行っている研究を発表する「自由論題」です。

今回は４つの共通論題と35の自由論題が揃いました。

共通論題では、「男女の賃金格差～解決への糸口～」(大西ゼミ・２年生)や「教員の長時間労働解消に向けて」(大西ゼミ・２年生)といった今日の日本社会での課題を取り上げたり、「グループワークに男女比率は関係するのか？」(星野ゼミ・３年生)のように、実際に男女各10名を集めて男女比の関係を検証するなど、内容を深める工夫がいたるところに見られました。

自由論題もまた、興味深い研究が続きました。地域連携活動に力を入れている田原ゼミの２年生からは「渋谷三丁目のまちづくりにおける問題に関する研究」、企業分析・財政会計などを扱っている中田ゼミの２年生からは「ファストフード業界における牛丼チェーンの経営戦略」など、それぞれのゼミでの学びを基に独自の視点で研究を深めていました。

発表者と会場の学生が活発に意見交換

各組とも内容をわかりやすくまとめたパワーポイントを使って説明を行いました。その内容も、例えば「宇都宮の中心商店街を活性化させるためにはどうしたらいいか」(橋元ゼミ・３年生)では宇都宮の中心商店街を取り上げた理由を述べた後、現状の分析、商店街が衰退した理由と続き、活性化させる策として聖地巡礼ビジネス案と地域内で使える電子マネーを提案というように、理路整然とした流れで紹介されていました。それに対して会場から「電子マネーの主体的な事業者は誰なのか」という核心を突いた質問が寄せられるなど、活発な意見の交換が行われました。

同発表会はゼミ学生同士が刺激し合い、学びの意欲を高める絶好の場になっています。また、２年次前期にゼミ選考を控える１年生にとっては、各ゼミの研究テーマや雰囲気を知る良い機会になりました。

インタビュー

男女20名を対象に実験。それを基に皆で一丸となって仮説を検証

共通論題　「グループワークに男女比率は関係するのか？」

経済学部３年（星野ゼミA）

チーム名：星野新選組

メンバー：和平 涼太さん　大阿久 諒平さん　森山 幹大さん　木村 千央さん　大塚 春輝さん※発表会当日欠席

実験の参加者集めから研究がスタート

――星野新撰組の研究の大きな特徴は男女それぞれ10人ずつ集めて検証したことです。実際に行ってどうでしたか。

森山さん

森山　星野ゼミの中で僕たちだけが男子のみのグループだったので、これを活かしたいと注目したのが男女比でした。

木村　このテーマに決めたとき先生から「検証が必要だね」と助言されました。検証するための人集めから始めました。

大阿久さん

大阿久　部活やゼミの後輩などに声掛けして実験の参加者を集めようとしたのですが、忙しいと断られてばかり。友人の友人を紹介してもらったりして、どうにか20名集めることができました。

和平さん

和平　参加者には女性４人、男性１人・女性３人など４班に分かれて、共通点探しゲームやコンセンサスゲームなどを行ってもらいました。みんな盛り上がって楽しんでくれました。

木村　実験の検証作業が膨大で、発表の直前までまとめの作業をしていました。その分、スライドが他グループに比べて劣った感は否めませんが、内容で勝負しようと仲間と励まし合っていたので、自信をもって発表に臨めました。

森山　まとめの作業では、先行研究がある中で自分たちのオリジナリティをいかに出すかについてはかなり皆で意見を出し合いました。

木村　今日インフルエンザで欠席した大塚君がゼミ長で、皆を上手に引っ張りながら話しやすい環境をつくってくれたのがよかったです。全員男だったので気を遣うことなく、冗談も言い合いながら話し合いはスムーズでした。

大阿久　一人ひとりがオーナーシップをもち、どんどん意見を出しながらまとめ上げていきました。それが成果につながったと思います。

自らが行動すれば高みを目指せることを実感

――今回の研究を振り返っての感想をお願いします。

木村さん

木村　大学に入って初めて大きなプロジェクトに関わりました。自分たちで一から検証して考察を出すという作業はやりがいがあり、楽しかったです。ただ、質問責めにあったのはちょっときつかったですね。

大阿久　会場からサンプル数が少ないのでは、メンタルやモチベーションが実験結果に影響するのではとの質問がありました。これらは僕たちの頭になかった視点で、確かにそうだなと思いました。ただ、期間が短い中で最善を尽くしたという自負はあります。何よりも自分たちが考えた仮説の検証はできたので、完成度が高い発表になったと思います。

和平　自分の意見はどうしても肯定的に捉えがちですが、否定的に見ることも必要だと思いました。それと、自らがどんどん行動することで高いところを目指せることを今回の活動で学びました。後輩たちには受け身になるなと伝えたいです。

森山　人間って意外に簡単に大きく変われるんだというのが僕の一番の感想です。適当に研究して内容の薄いことを発表することもできます。そうではなく、熱量の高い仲間と全力で研究に向き合うことで考え方に幅が広がり、自分に自信をもてるようになりました。それが僕にとって大きな収穫です。

発表風景

（取材　令和５年12月17日）

インタビュー

サンロッカーズ渋谷の課題解決に「同一視」と「儀礼」を応用

自由論題　「サンロッカーズ渋谷の経営に関する分析」

経済学部３年（藤山ゼミA）
チーム名：フジヤマグループ
メンバー：浅沼 隼伍さん　三浦 鳳将さん　伊藤 彩乃さん　下坂 将也さん

サンロッカーズ渋谷担当者に直接話を聞けた！

――男子プロバスケットボールチームBリーグのサンロッカーズ渋谷（以下、サンロッカーズ）を取り上げた理由と研究の概要を教えてください。

三浦　藤山先生がサンロッカーズのプロジェクトに関わっていて、面白そうだなと。僕と浅沼君がサンロッカーズの本拠地である青山学院記念館に試合を見に行きました。

浅沼　大学の体育館をホームとしていることが意外でした。

浅沼さん

伊藤　２人が撮ってきた写真や動画を見たのですが、野球に比べると盛り上がりが少ないという印象を受けました。

下坂　僕も同じです。野球やサッカーはスタジアム全体が盛り上がるのに対して、サンロッカーズの場合は、特に２階席の盛り上がりのなさが気になりました。

三浦さん

三浦　４人でサンロッカーズの担当者に話を聞きに行きました。2023年７月にBリーグの変革が発表され、2026年に実施予定だそうです。サンロッカーズもその変革に伴う新基準を満たすために頑張っているとのことでした。

伊藤　そこまで話していいのと思うような内容をたくさん聞くことができました。そのおかげでサンロッカーズが目指している方向性がよくわかり、課題も見付けやすかったです。

伊藤さん

三浦　僕たちが課題だと思ったのは若いファン層が少ないことです。それにはどうしたらよいかを皆で話し合いました。

伊藤　若者向けのグッズを作るなど細かい施策はすぐに思いつくのですが、それだけでいいのかという話になりました。

三浦　例えば、健康になるためにダイエットを始めたのに、いつの間にかダイエットが目的になり、健康を害することがあります。それと同じで僕らが目指すのはグッズ制作ではなく、若者層の増加。そこを見据えてどうすればいいかという思考に変えました。そこで出てきたのが、授業で習った「同一視」[1]と「儀礼」[2]を応用することです。

浅沼　同一視と儀礼は１年生にはなじみのない言葉です。発表では、ワールドカップの自国の応援を同一視の例に出すなど、わかりやすく伝える工夫をしました。

理論的思考や物事の本質を見る力が身に付いた

――今回の研究成果発表を通して感じたことは？

伊藤　三浦君と浅沼君に任せた部分が結構ありました。もっと積極的に参加すべきだったと反省しています。

下坂　若い層のファン拡大という目的があり、それを実現する手法として同一視と儀礼を応用する、その具体策としてこういう方法がある、というように僕たちの研究は理論的な展開になっています。この作業を通して僕自身、理論的な思考が結構できるようになったと思います。

下坂さん

浅沼　各自忙しい中でコミュニケーションを密に取りながら全員が一丸になって取り組んだからこそ、一定の成果を出せました。協働作業の楽しさと大切さを知ることができました。

三浦　物事の本質を見る力が付いた感じがします。今度、サンロッカーズの担当者にプレゼンします。どんな感想をもらえるか、とても楽しみです。

1）自分が特定の集団そのものであるかのように認知し、結果的にその集団の利益になるように行動したりすること
2）E.デュルケームという社会学者によって、集団の連帯を強化するものとして定義された共通の価値や規範に基づく行動

発表風景

（取材　令和５年12月17日）